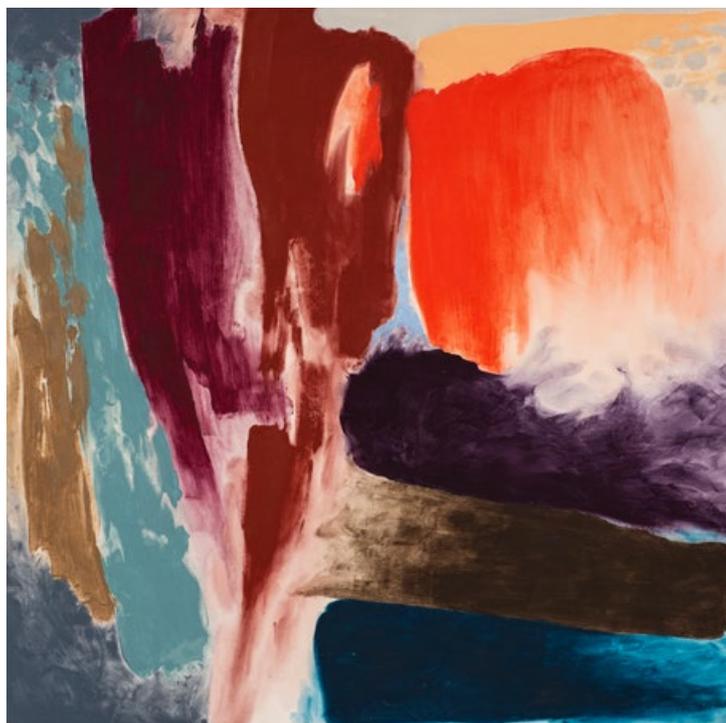


カラーフィールド 色の海を泳ぐ

Color Fields from the Collection of Audrey and David Mirvish



このたび、DIC川村記念美術館は、カナダのデイヴィッド・マーヴィッシュ・ギャラリーの協力を得て、本邦初の「カラーフィールド」展を開催します。1950年代末から60年代にかけて、大きなカンヴァスに色彩を広げて「場」をつくる抽象絵画の潮流「カラーフィールド」がアメリカを中心に発展し、その後の美術にも影響を与えました。本展では、カラーフィールド関連の9作家を取り上げ、おもに1960年代以降に制作された約50作品を展覧します。作家たちの色彩との格闘と新たな技法の開拓、色彩の持つ無限の可能性に目を向ける機会となれば幸いです。

会 期	2022年3月19日(土) – 9月4日(日)
開館時間	9:30-17:00 (入館は16:30まで)
休 館 日	月曜 (ただし3/21、7/18は開館)、3/22(火)、7/19(火)
入 館 料	一般1,500円、学生・65歳以上1,300円、小中学生・高校生600円 (事前予約制)
会 場	DIC川村記念美術館 (千葉県佐倉市坂戸631)
電 話	掲載用=050-5541-8600 (ハローダイヤル) 取材用=043-498-2672 (直通)
主 催	DIC株式会社
特別協力	デイヴィッド・マーヴィッシュ・ギャラリー
後 援	在日カナダ大使館、千葉県、千葉県教育委員会、佐倉市、佐倉市教育委員会

概要

カラーフィールドは1950年代後半から60年代にかけてアメリカを中心に発展した抽象絵画の傾向です。大きなカンヴァス一面に色彩を用いて場（＝フィールド）を創出させることで、広がりある豊かな画面を作り出しました。

本展は、このカラーフィールド作品の収集で世界的に知られるマーヴィッシュ・コレクションより、関連する作家9名に焦点をあて、1960年代以降の出色の作品を紹介する本邦初の展覧会です。彼らは、色彩と絵画の関係を各々の方法で模索し、その過程で多くの作家が独自の描画に至りました。変形的な外形を持つシェイプト・カンヴァスの使用や、絵具をカンヴァスに染み込ませるステイニング技法、あるいはスプレーガンの噴霧で色を蒸着させる画法など、従来では考えの及ばなかった手法を考案し、絵画に新たな地平を切り拓いたのです。

こうして創出された空間を満たす大画面と、そこで展開される様々な色彩についての思考は、今なお見るものの感覚や想像力を刺激してやみません。作品が体現する色の世界、その海を泳ぐ私たちは、色の波に身をまかせ、溺れ、時に抗いながら、絵画と色彩の無限の可能性に出会うでしょう。色の海を泳ぎきった先には、きっと、私たち自身の中にある彩り豊かで、高潔な、けれど同時に暗く、黒いものをも包む、美しい地平を感じとっていただけるのではないのでしょうか。

みどころ

- ① 1950年代後半から60年代、アメリカを中心地として発展した抽象絵画の潮流「**カラーフィールド**」の**代表作を紹介する、日本で初めての展覧会**。カラーフィールドの画家と交流した彫刻家を含む9名の作家たちが開拓した豊かな色彩と技法を見ることができます。
- ② 世界で最も質の良いカラーフィールド作品を所蔵している**カナダの「マーヴィッシュ・コレクション」より約40点の作品が初来日**。DIC川村記念美術館の収蔵品とあわせて約50点を展覧します。
- ③ 床置きから横5mを超える大型絵画まで、色と質感の豊かさを堪能できる作品群は人の官能性を呼び覚ますことでしょう。**章ごとに微妙に明度が異なる展示空間で、ゆらめく色の海を回遊するような鑑賞体験が期待できます。**

オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ・コレクション

マーヴィッシュ夫妻は、世界的に知られるカラーフィールド作品のコレクターです。画家であった母の影響により、早くから芸術に強い興味を抱いたデイヴィッド氏は、1963年秋、18歳でカナダのトロントに念願のギャラリーを開廊。ルイスやノーランド、オリツキーなどの作品に魅了され、じきにカラーフィールド作家の個展やグループ展を中心に企画し始めます。1967年の結婚後は、妻のオードリー氏と芸術への情熱を共有し、1978年のギャラリー閉廊まで約15年間、企画開催に合わせて直接作家から購入した作品群は、世界最良のカラーフィールド作品のコレクションとして知られています。現在も精力的に作品を収集し、コレクションの一部を欧米の美術館で開催される展覧会へ出品して、作家や作品理解に寄与する活動を継続しています。

出品作家紹介

フランク・ステラ (1936- アメリカ)

1958年にプリンストン大学を卒業後、画面を黒のストライプで埋め尽くした絵画〈ブラック・シリーズ〉に取り組む。これがニューヨーク近代美術館の「16人のアメリカ人たち」展に出品され、ステラは大きな注目を集めることになった。その後、シェイプト・カンヴァスをを用いた〈ダートマス・ペインティング〉、鮮やかな色彩を導入した〈不整多角形〉シリーズなど、次々に新しいスタイルを展開し、絵画の可能性を追求。1970年代以降は立体的な作品も手掛けるようになり、現在まで精力的に制作を続けている。



貸出国版 1.

フランク・ステラ

《モールトンヴィル II》1966年

蛍光アルキド樹脂、エポキシ塗料、カンヴァス

315 × 218.4cm

オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ蔵

© 2022 Frank Stella / ARS, New York / JASPAR, Tokyo G2749



ケネス・ノーランド (1924-2010 アメリカ)

米空軍での兵役を経て、ブラック・マウンテン・カレッジで学ぶ。1950年代前半に批評家クレメント・グリーンバーグ、作家フランケンサラー、ルイスらと知り合い、その影響下で自らのスタイルを形成。1956年から同心円による絵画、また1963年からは〈シェヴロン〉(V字を重ねた形)による絵画を制作し始め、これらがノーランドを代表するモチーフとなる。その後も1960年代後半には色彩の帯を用いた作品、70年代には多角形のカンヴァス作品など、さまざまな手法を通じて絵画における色彩と形体を探究した。

貸出国版 2.

ケネス・ノーランド 《あれ》1958-59年

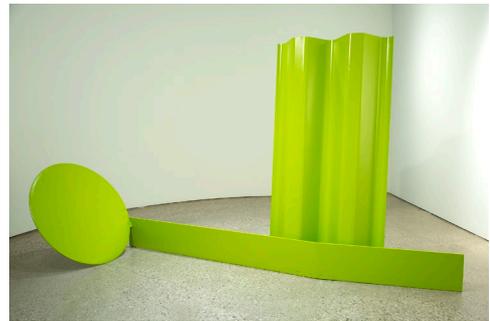
アクリル、カンヴァス 213 × 213cm

オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ蔵

© Kenneth Noland / VAGA at ARS, NY / JASPAR, Tokyo 2022 G2749

アンソニー・カロ (1924-2013 イギリス)

ロンドンのロイヤル・アカデミー・スクールで伝統的な彫刻技法を学びながら、ヘンリー・ムーアのアシスタントとして働く。1950年代には具象彫刻を制作していたが、1959年のアメリカ滞在を経てスタイルを大きく転換。鉄をつなぎ合わせ、赤・青・黄といった鮮やかな色彩を施す床置き彫刻を制作し始める。1966年からは卓上に設置する〈テーブル・ピース〉、1970年代には錆びた鉄板による彫刻など、いずれも従来の彫刻にはない軽やかな形体が高く評価された。1992年、高松宮殿下記念世界文化賞を受賞。



アンソニー・カロ 《原初の光》1966年

塗料、スチール 203.2 × 353.1 × 119.4cm

オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ蔵

© Anthony Caro. All rights reserved, DACS & JASPAR 2022 G2749



ジャック・ブッシュ (1909-1977 カナダ)

モントリオールとトロントの美術学校で学ぶ。1968年まで商業イラストレーターとして生計を立てており、絵画はその傍らで制作していた。1930年代から40年代は風景画に取り組んでいたが、50年代にニューヨーク・スクールの影響を受け、抽象画家グループ「ペインターズ・イレヴン」に参加。以後、批評家クレメント・グリーンバーグとの交流を通じて自らのスタイルを確立していった。1967年にはサンパウロ・ビエンナーレの代表に選出されるなど評価が高まり、現在ではカナダの重要な抽象画家の一人とみなされている。

ジャック・ブッシュ 《はためく旗》1968年
アクリル、カンヴァス 221 × 207cm
オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ蔵
© SOCAN, Montréal & JASPAR, Tokyo, 2022 G2749

モーリス・ルイス (1912-1962 アメリカ)

メリーランド州のボルチモアに生まれる。地元の美術学校で学び、卒業後は絵画制作の傍ら、公共美術計画で壁画制作に参加するなど多くの職を経験した。初期は人物や風景を主題とした作品や、ピカソやミロを彷彿とさせる作品を描く。1948年より、速乾性があり希釈しても発色の良い溶解性アクリル絵の具「マグナ」を使用。1953年にフランケンサーラーの《山と海》に影響を受け、1954年よりステイニング技法による作品を制作。なかでも〈ヴェール〉〈アンファールド〉〈ストライプ〉の3つのシリーズが知られる。



貸出図版 3.
モーリス・ルイス 《無題 (イタリアン・ヴェール)》1960年
マグナ (アクリル)、カンヴァス 190.5 × 254cm
オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ蔵



ヘレン・フランケンサーラー (1928-2011 アメリカ)

ニューヨーク生まれの抽象表現主義第二世代の画家。ダルトンスクール在学中はメキシコ人画家ルフィノ・タマヨに、ペンントン大学ではポール・フィーリーに師事。1950年に批評家クレメント・グリーンバーグに出会い、その勧めでハンス・ホフマンに学ぶ。初期はキュビズム風の作品を手掛けていたが、1952年には薄く溶いた絵具をカンヴァスに流して染み込ませるステイニング技法を生み出し、代表作《山と海》はルイスやノーランドに影響を与えた。1966年のヴェネツィア・ビエンナーレに参加。1961年より版画にも熱心に取り組み、絵画にとどまらない制作を行った。

ヘレン・フランケンサーラー 《シグナル》1969年
アクリル、カンヴァス 259.1 × 251.5cm
オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ蔵
© 2022 Helen Frankenthaler /ARS, New York / JASPAR, Tokyo G2749



貸出図版 4.

ラリー・プーンズ《雨のレース》1972年
アクリル、カンヴァス 262.9 × 395cm
オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ蔵
© Larry Poons / VAGA at ARS, NY / JASPAR, Tokyo 2022 G2749

ラリー・プーンズ (1937- アメリカ)

東京に生まれる。元々作曲を学んでいたが、1959年のニューマンの個展を見て音楽家ではなく画家の道に進むことに決め、ボストン美術館付属学校で学ぶ。1960年代は単色で塗られたカンヴァスに小さな円や楕円を描きこんだ作品で知られ、1965年の展覧会「レスポンシヴ・アイ (応答する眼)」へ選出された。1969年にはメトロポリタン美術館「ニューヨークの絵画と彫刻 1940-70」展に最年少で参加。1969年以降は初期からスタイルを大幅に変え、床に広げたカンヴァスにバケツでアクリル絵の具を何層も重ねるエレファントスキン・ペインティングや、カンヴァスに向けて絵具を投げつけるスロー・ペインティングに取り組み、現在も制作を続けている。

フリーデル・ズーバス (1915-1994 アメリカ)

ベルリンに生まれ、1939年にアメリカへ移住。ルイスなど、同世代の画家が下塗りをしなかったのとは異なり、下地を丁寧に施したカンヴァスの上に、アクリル絵具を用いて、羽のような筆のタッチで色の帯をかたどり、それらが画面を自由に行き交う特徴的な作品を制作する。1952年にフランケンサーラーとスタジオを共同で使用し、同年にはティボール・デ・ナジ画廊で初めての個展を開催。以降もレオ・キャステリ画廊など有力な画廊で個展が開催されるほか、複数のグループ展にも出品。1960年代終わりごろからコーネル大学等で教職にもついた。1975年にボストンのショーマツ銀行の依頼で描いた壁画《黙示録／交差》は今なおアメリカ最大の抽象絵画のひとつである。



貸出図版 5.

フリーデル・ズーバス《捕らわれたフェニックス》1982年
マグナ (アクリル)、カンヴァス 182.9 × 182.9cm
オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ蔵
© 2022 Friedel Dzubas / ARS, New York / JASPAR, Tokyo G2749



ジュールズ・オリツキー《高み》1966年
アクリル、カンヴァス 264.8 × 504.2cm
オードリー&デイヴィッド・マーヴィッシュ蔵
© Jules Olitski / VAGA at ARS, NY / JASPAR, Tokyo 2022 G2749

ジュールズ・オリツキー (1922-2007 アメリカ)

ロシア生まれ。1960年にステイニング技法による制作を開始し、カラーフィールドの作家として注目を集める。1964年に画面全体を緩やかなグラデーションで覆う色面絵画を発表。翌1965年より工業用のスプレーガンを使用した霞が漂うような繊細な表現を創出、独自の画風へと昇華させた。1969年には存命中の画家としては初となる、メトロポリタン美術館での個展を実現。1970年以降は絵筆による作画に回帰し、荒々しい表情をもつ厚塗りの抽象画を制作。生涯に渡り、絵画における色彩と光の効果を探求した。絵画のほか巨大なアルミニウム製のスプレー彫刻も発表している。

会期中のイベント 詳細と申し込み方法は公式サイトでお知らせします

定時ガイドツアー | 要当日予約

毎日14:00より当館ガイドスタッフがコレクション展示を含めた館内の展示をご案内します。

学芸員によるギャラリートーク | 要事前予約

毎月第2土曜日11:30より学芸員が本展の作品解説をいたします。

講演 | 要事前予約

6月12日 13:30-15:00

加治屋健司氏（現代美術史、東京大学大学院総合文化研究科教授）

館内茶席 | 予約不要

坂本紫穂氏（和菓子作家）の監修による本展オリジナルのお菓子をご用意します。

付属ギャラリー | 一部要予約

3-5月：ミュージアムショップ主催の展示およびポップアップストア

7-8月：PIGMENT TOKYO顔料展示と夏休みワークショップ

- 本展は事前予約制です。
- 新型コロナウイルスの感染状況により、やむを得ず記載内容を変更する場合があります。

図版掲載をご希望の方へ

貸出図版を下記よりダウンロードいただけます。

https://www.artpr.jp/kawamura_dic_museum/color-fields

- * 作家名・タイトル・制作年・所蔵者名および著作権クレジットを必ず明記してください。
- * 発行前にPDFで記事のレイアウトをお送りください。掲載内容の正誤確認をいたします。
- * 発行後、紙媒体は掲載物（又は表紙と掲載頁のPDF）送付を、ウェブは公開URLの通知をお願いします。

取材お申込み・お問い合わせ先

DIC川村記念美術館 tel.043-498-2672

広報担当：海谷、小林 press@kawamura-museum.com

学芸担当：前田